

## 宇田川文海・補遺

堀部功夫

○最初に、『同志社国文学』第七号掲載の「宇田川文海伝の筋書」に、自分に責任のある誤植・ミスがあったので、訂正して不注意をおわびする。

ページ	段	行	誤	正
七五	上	2	二月四日	二月二四日
七七	下	9	この頃の	この頃の頃
八四	上	17	恐も新年の	恐多くも新年の
八五	上	13	御その儘に	御題をその儘に
九〇	下	13	詐欺取材犯	詐欺取材犯
九一	下	12	九〇月	一〇月二日

○次に、「宇田川文海伝の筋書」を増補する。

宇田川文海・補遺

○あわせて、『同志社国文学』第五・六合併号掲載の「宇田川文海著作年表」遺漏分を補遺（当時未確認資料として〇印を付した）する。  
 ○作成にあたっては、宇田川初氏・清水三郎氏・谷沢永一氏・肥田皓三氏をはじめ多くの方々の御教示を頂いた。また大阪府立図書館・神戸市立図書館・国立国会図書館・天理図書館・名古屋市立鶴舞中央図書館等諸機関の御世話になった。まことに有難く御礼申しあげる。

## 「宇田川文海伝の筋書」補遺

明治三十二年

七月二〇日から、「西南拾遺」（四冊）編輯刊。

二二年一月五日から、松林伯円がこれ（と推定）を原作と

して潤色した講談「西南操競梅松新話」を、「百千鳥」に連載。

九月二七日、北久太郎八百屋町筋の芳常亭における新聞雜誌業懇親宴に「大阪新聞」代表の一人として出席（九月三〇日付「大阪日報」記事）。

一月下旬、箕面へ紅葉狩。同行は小室信介ら（二月二九日付「大阪日報」・山陰案山子「箕面紀行」）。

### 明治三年

一月一〇日、北区中の島中学校における夜会（西川甫主催）に出席。一日、広岡の別荘における医事会の新年会に「大阪新聞」代表の一人として出席（一月三日付「大阪日報」記事）。一七日、南地針半楼における新聞雜誌記者の懇親会に「大阪新聞」代表の一人として出席（一月二〇日付「大阪日報」記事）。

### 明治五年

一月刊、垣貫二右衛門「商工浪華の魁」に「有名諸大家・新聞論説家」の一人として登録されている（肥田皓三氏示教）。

### 明治十八年

八月一九日、始めて有馬へ登った。妻ツル・娘フサと和田風月と

が同伴。有馬温泉場では、今を時めく流行作家として大歓迎をうけた（「有馬筆」）。

### 明治二十年

九月二五日、詐欺取財犯の嫌疑により、大阪府警察本部に引致され、爾後留置となり取調べを受ける。文海はかつて元判事土居徹より、その私行の新聞記事となるのを事前に差止めるとして三百円の金を受取り、「大朝日新聞」主筆関徳へ五円、同社探訪員石黒猪三郎へ一〇円を分配していた（「大阪毎日新聞」羽山尚徳へ五円を贈ろうとしたが受取られなかった。）ところがその後、土居の私行が新聞紙上に現われてしまったために、文海の「恐喝取財」などと喧伝されたのである（一〇月二日、四日付「東雲新聞」記事）。

一〇月二一日刊「新社会灯」に文海評が載っているらしい（一〇月一〇日付「東雲新聞」広告）が未見。

十一月二日、出獄。その後、臥床。しばらく文筆活動から遠ざかり、もっぱら心身の保養につとめた（「苗代水上田恩沢」）。

### 明治二十二年

四月三〇日刊、柚原英吉「市内大阪名所図絵」に「大新聞記者」として一〇名挙げられた中に入っている（肥田皓三氏示教）。

## 明治三四年

二月八日、富田屋新築落成祝宴会に出席（二月一日刊「あほら誌」・小田垣哲次郎「富田屋新築落成祝えん会」）。

一〇月一九日から、「紅葉」を「<sup>大</sup>文芸」に連載。

一月十五日刊「葦分船」の柯亭邦彦「大阪文芸第一号評言」においても好意的な評をうけた。

## 明治三五年

一月五日、官民一致倶楽部における大江吟社（亀山一山ら、詩歌人の集い）発会に出席（二月一日刊「<sup>大</sup>文芸」雑報）。

八月二五日刊「同仇」・震天子「巷談偶録」は、「辻<sup>ツ</sup>汰川蚊<sup>ぶん</sup>痒」の「馬琴の奇策、其妙趣其妙向窃むべく取るべし」という発言を檜玉にあげて、「奇才子の奇文に驚駭して、窃て以て婦女の歎心を得んとす。之でも新聞記者の貴称を附すべき、男一匹の人足だッかひな」と揶揄している。

一〇月二二日、備一亭における大阪文芸会例会に出席（十一月二五日刊「大阪文芸雑誌」雑報）。一月二十九日、備一亭における同会例会に出席（二六年一月二日刊「大阪文芸雑誌」雑報）。

二月一九日刊、梅河三浜「大阪名勝独案内付浪華土産千金之宝」に「森羅万象玉揃集覧・新聞記者及小説家」の一人として登録

宇田川文海・補遺

されている（肥田皓三氏示教）。

## 明治二六年

三月二〇日刊「浪花文学」の塚枯川「水無庵漫筆」に、関西文壇を一覧して「毎日新聞には老将軍宇田川文海子あれど、是は殆んど今日の文学に関係なからん」と、文海に見切りをつけた言句がある。

六月二二日、備一亭における美術談話会第一会に出席、「めくらのかきのぞき」と題して談話予定（六月二〇日付「大朝」記事）。

六月二四日、岡野半牧・中川重麗・須藤南翠と共に文学の同好懇親会を發起、金波楼における同会に出席（六月二三日、二七日付「大朝」記事）。

## 明治二七年

一月一九日から、「<sup>滑稽</sup>演劇大当矢的魂」を「<sup>大</sup>毎日新聞」に連載（二八日、めでたく打出し）。

二三日、尾半一座が南地演舞場において「矢的魂」を演じる（一月二五日付「大朝」記事）。

## 明治二九年

五月、奈良における関西新聞雑誌同業懇親会に出席（五月五日付

「大朝」記事〕。

### 明治三〇年

この年、共楽会（上方芸能を定期的に鑑賞する集い）の仕事で奔走する。その姿は、文学活動が沈滞気味だけに人目をひいて、六月三〇日刊「文学評論」の「文界消息」には「○宇田川文海子は専ら共楽会の業務に浮身をやつし、全く文壇と気脈を断たれたり」と、或人は曰く文壇を亡命せり、或人は曰く文壇を放逐せられたりと「さまざまに取沙汰された」とある。八月一〇日刊「喜楽」・雪謝「寸楮呈仕候」の「宇田川文海様へ」宛てた項も「共楽会の景況は当節如何に御座候哉…」以下この一件に終始している。

九月一〇日刊「喜楽」掲載「彙報」は「久しく毎日に筆を執られし宇田川文海老は殆ど退社の姿なりと聞く」と、文海の沈黙を伝えている。ちなみに同誌掲載の井底居主人「踊のさま〜」は作者の評判を踊に見たてて述べたものであるが「宇田川文海先生／洗濯の浴衣みにくき踊かな／古衣の洗濯、洗張はなんば古物流行の折なればとてチト閉口仕る、此頃御顔の見えぬは新衣調製最中か」とある（肥田皓三氏示教）。

### 明治三三年

四月九日、天理教本部へ出頭、一〇日、柳本より帰阪（「月詣集三」）。五月一七日、本部参拜。一八日、帰阪（「月詣集四」）。六月七日、妻ツルを伴って月詣。七月三日、月詣、娘フサの安産を祈る。四日、帰阪。五日、妻ツル東上、娘フサ出産の介抱の為である。七日、娘フサは初めての男子嘉一を安産。ところが産婆の失措からフサは疾病を惹起し、危急存亡の秋に迫った。ツルは一心に天理教を念じ思いついた手当を施してみると不思議にもフサの難病が治癒し九死に一生を得た。「其以後は、吾輩等夫婦と娘は云ふに及ばず娘の婿も亦、大神様と教祖の御神徳の著明であることを格別に信仰いたしましたして、日夜感謝の念に充されてをります」（「月詣集六」）。八月八日、親族同伴で本部に参拜して謝礼。九日、布留の滝を見て、一〇日、帰阪。九月、娘フサが二人の孫を伴い妻ツルと連立って転地療養かたぐい来阪した。一五日、月詣（「月詣集七」）。一月一〇日、月詣（「月詣集八」）。十一月三日、妻ツル等と月詣、一四日、多武峰を廻って帰阪（「月詣集九」）。

### 明治三四年

一月三日、南地演舞場における大阪文芸同好者の大会に出席（一月二〇日刊「大阪経済雑誌」記事）。

一月三〇日から二月三日までの間に、朝日座において公演された

新俳優大台同の演劇（川上音二郎ら、「洋行中の悲劇」・「英国革命史」）を観る（「新演劇の大台同を観る」）。

七月、朝日座の劇（秋月桂太郎ら、「無花果」・「兄殺し」）を観る（「朝日座の劇を観て所感を述ぶ」）。

九月五日刊「大阪経済雑誌」・「日本全国新聞雑誌記者名鑑（其三）」に行司の一人として「塚新聞 宇田川文海」の名がある。この頃、「塚新聞」に関係していたのであろう。

一〇月一五日刊「大阪経済雑誌」に「大阪交際社会知名紳士三副対見立」というものが掲げてあるが、そのうち「悟道」の項に「仏教 増田正心（医師）／哲学 宇田川文海（塚新聞）／社会 大井憲太郎（弁護士）」と見える。

#### 明治三五年

六月、博労町吉常楼における「大阪朝報」創刊前祝宴に招かれて出席、所思を述べた（「再刊の祝辞」）。

この頃、「大阪朝報」社長永江為政に、婦人記者として菅野ずがを紹介した（七月三一日付「大阪朝報」記事）。

この頃、東区横堀三丁目九二番邸へ転居（七月一日付「大阪朝報」広告）。

七月一日から、「金仙花」を「大阪朝報」に連載（九月四日、

宇田川文海・補遺

大尾）。

「金仙花」の如きは殆んど一顧の価値なし」とする否定的享受を伝える投書（八月一日付「大阪朝報」投書）と、「殆んど社会より隠れんとせし文海先生を引ずり出して驚くべき若婦りの金仙花でふ今人情の描写を紙上に輝すこととなった……実はれ吾々の大幸福である」と歓迎するカーテン・コールの投書（九月三日付「大阪朝報」投書）とが掲載された。

七月二九日、大阪倶楽部における大阪演劇協会評議員会に出席、観劇方法について発議（七月三一日付「大阪朝報」記事）。

一月一〇日、軽症の赤痢で桃山病院に入院中の菅野ずがを見舞う（二月二四日付「大阪朝報」・須賀子「一週間（十八）」）。一二日にも再び（二月二七日付「大阪朝報」・須賀子「一週間（二十一日）」）。

一月二三日、朝日座における大阪演劇協会主催第八回観劇会に出席（一月一五日付「大阪朝報」記事）。

二月二日、土佐堀魚喜楼における「大阪朝報」忘年会に來賓として出席、演説（二月二五日付「大阪朝報」・幽月女史「忘年会の記（三）」）。

#### 明治三六年

二月二七日、茶臼山邦福寺における故勝諺蔵の建碑式に参拜。管野すがも同行した（三月三日付「大阪朝報」・幽月女史筆記「勝蔵君の建碑式に就て」）。

この年、「扶桑新聞」第五回内国勸業博覧会通信記者の一員に加わる（「豊公遺物展覧会を観る」）。

七月一八日、泉布館における豊公遺物展覧会を観る。同行は佐藤素州・管野すが（「豊公遺物展覧会を観る」）。

一〇月五日、中の島公園において観月。同行は管野すが・ひで（と推定）姉妹（「十五夜」）。

### 明治三七年

一〇月一六日、加賀翠溪邸における保古会尾崎紅葉氏追悼会に「蚊帳画賛」「俳句」各一幅を出品（明三八年五月刊「保古会出品目録」——肥田皓三氏示教）。

### 明治三九年

七月八日、角座における伊藤景則（大阪演劇協会幹事）送別会に出席（七月一五日刊「大阪経済雑誌」・劇痴道人「大阪演劇協会の活動」）。

### 明治四一年

八月三〇日付「読売新聞」・紅蓮洞「文壇垣覗き（三十九）」に、「……◎独り関西に於ては、宇田川文海、猶覇を称し此の手によりて関西地方の新聞に其の小説の紹介されたのも少くはなかつた。其の甚だしきは無名作家の書いた原稿に文海自筆で僅に、宇田川文海作の六字を署すれば、其の稿料直に数倍に上るといふ勢であつた。此く侮るべからざる勢力のあつた宇田川文海は今は何等の聞ゆる無くなつて了つた。風の便によれば◎文海翁、猶中京辺に居つて未だ此の世の人だといふ。盛者必滅といふものゝ、其の余りのことなには驚かざるを得ない。而して、余の寡聞か知らぬが、此の代作といふが公々然と行はれたのは此の宇田川文海のことが嚆矢だらう。……」とあつて、文海の今昔を窺うに足る。なお九月一三日付「読売新聞」・日の雀「代作、名前貸し」も題名の事項に関連して文海に言及している。

一〇月二五日刊「大阪経済雑誌」・小林麗風「十分間の記（九）」後半は、文海訪問録であるが「宇田川文海翁が、昔日冲天の勢を以て関西の文壇に馳せた驍名は巷説二葉松等の脚本に依つて、世人から明治近松とまで謳はれた程である、其唄はれた文海が今は何うであらう、老ひては麒麟も驚馬か、何かは知らないが、昔日の俤は毛程もあるまい、唯だ危うじて田舎新紙に緋り付き、余喘を保つて居

らるゝのは、昔ながらの情力であつて現代思潮に迎へらるゝ為めではないのだ、洵にハやお気の毒千萬の話であるが、文芸界陶汰の辛辣なる、此名将に一步の憐みを加へず、無残にも生け乍ら葬り去らんとするのである、悲風慘雨、霏々蕭々として彼が身边を圍繞して居るとは、借ても儂なきは文士の末路なる哉」と、文海の現況を伝えた一節をはじめ、興味深い記事である（肥田皓三氏示教）。

#### 明治四二年

三月二日、兵庫県美鷹郡淡河町戊申会の請に応じ、淡河高等小學校において「勤儉自彊」を講演（「七日紀行」）。

#### 大正三年

一月八日、堺大浜公園丸万楼における麴種会（天満基督教會に属する人々の家庭的親睦を目的とする会）第五回新年宴會に出席、夫人同伴、席上演説をする（一月二五日刊「大阪經濟雜誌」記事）。

七月三日、住吉公園内小山楼において永江為政らと晚餐をとともにしつつ、住吉公園の経綸を語り、史を談じた（七月二五日刊「大阪經濟雜誌」・黄の字や手記「蟬しぐれ」）。一〇月二五日にも、永江為政の訪問をうけている（一〇月二五日刊「大阪經濟雜誌」・黄の字や手記「氷霜」）。

宇田川文海・補遺

#### 大正四年

六月二三日、大和行。一九日、帰宅（墨の江より）。

七月一六日、大和より帰宅（賀茂真淵の夫人）。

八月一日、有馬へ登る。家族（妻ツル・娘フサ・孫女富貴子・初子）同伴。二日、帰宅（有馬筆）。

九月、泉州大和川保養院における第一回通俗講演會に臨み、「私の此の顔の疵」と題して講演（私の此の顔の疵）。

#### 大正六年

五月一七日、浜寺公園土居通夫邸における園遊會に参列、講演。

二六日、大阪階行社における歴兵恩謝會に出席、杉山・塙両檢校の伝記を述べる。六月一日、長堀岸松館における松村介石歡迎會に列席。一五日、大阪天王寺公會堂における弘法大師降誕奉祝紀念講演會を聴きにいった（さみだれ隨感隨筆）。

八月二一日、大浜公會堂における第二四回獻身紀念感謝會に出席、演説（柳原神学七を歓迎す）。

九月八日か、中の島ホテルにおける青木庄蔵送別會に出席（青木庄蔵君の復活を祝す）。

#### 大正七年

九月下旬から、一〇日間程、東上〔音楽小話——東京土産〕。

大正一四年

一〇月二日、塚の頭本寺における高三隆達（小歌初祖）の記念碑除幕式に出席、祝辞を述べた（音楽小話——隆達の建碑式）。

この頃、「契沖阿蘭梨の少年時代」をラジオ放送した（音楽小話——ラジオの利害）。

大正一五年

九月一日、中の島豊国神社における豊公事蹟の講演に「慶長の地震と豊公」と題して講演（音楽小話——地震—秀吉—家光）。

「宇田川文海著作年表」補遺

題名・書名	刊行物名・ （出版者）	署名	年月日
序	商工浪華の魁 技藝余芳 桂林余芳 智恵ノ曙ノ発刊 ヲ祝ス	半痴居士 半痴居士稿 宇田川文海謹言	明15・1 明15・2・7カ 明19・12・22
○〔政治〕断腸之余 ○〔小説〕断腸之余 ○〔小説〕滴「序」 ○〔松の〕操美人 の生理「序」	（駸々堂） （駸々堂） （駸々堂）		

○花日和 〔芦辺踊唱歌〕	（駸々堂）	大阪毎日新聞	半痴居士	明24・5・10
夕涼	日本一致俱樂部	宇田川文海稿		明24・7・16
夕涼	官民一致俱樂部	〔無署名〕		明24・8・16
夕涼	官民一致俱樂部	〔無署名〕		明24・9・16
夕涼	官民一致俱樂部	〔無署名〕		明24・10・16
坐睡	官民一致俱樂部	宇田川文海稿		明25・2・14
造船学士 （明文館）	官民一致俱樂部	宇田川文海著		明25・11・14
病後の美人	国民之友	宇田川文海述		明26・1・13
○但馬行李	藻塩草			
ゆふだすき	商業資料	半痴居士		明26・11・10
初売	商業資料	宇田川文海		明27・1・10
広告	商業資料	宇田川文海		明27・2・10
祝粹世界発行	粹世界	宇田川文海		明28・6・5
文海余滴	すゐせかい	宇田川文海		明28・7・7
文海余滴	すゐせかい	宇田川文海		明28・9・7
○真	婦女の友			
○明智光春（上）	美術新報			
○岸駒	美術新報			

金仙花	七福神	福耳	花ゑみ	想古屋の元旦を想像して	御題新年梅	車善七	吁「一年有半」	祝辞	て所感を述ぶ	朝日座の劇を観	新演劇の大合同を観る	神戸の新聞談	辛丑閑話	(俳句)	(俳句)	山中鹿之助	新伊国旅の友の巻首に記す	宇田川文海氏の著作	兼日本枕を賞る
大阪朝報	大阪朝報	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	神戸新聞	神戸新聞	神戸新聞	神戸新聞	大阪経済雑誌	紀伊国旅の友(平井五郎堂)	商業資料	快楽
宇田川文海	宇田川文海	半痴居士作	半痴居士作	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	半痴居士	文海	文海	演	宇田川文海口	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海
明35.9.7.4	明35.7.1	明35.1.5	明35.1.5	明35.1.5	明35.1.5	明34.12.29	明34.11.15	明34.11.15	明34.7.20	明34.2.5	明34.1.3	明34.1.21	明33.9.30	明33.9.28	明32.9.5	明32.5.11	明31.10.1	明31.2.1	明31.2.1
新年梅	破魔弓	豊太閤第二編	おみさ子	新お加太閤	未亡人	豊公遺物展覧会を観る	保津川下り	保津川下り	「博物場に保古会を観る」の序	教科書袖の露	新年海	新年海	若水	(亀末広の餅の引札)	京に行くを送る	片岡我当君の東	再刊の祝辞	二人武士	黄檗録
大阪経済雑誌	扶桑新聞	扶桑新聞	因伯時報	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	扶桑新聞	大阪朝報	大阪朝報	扶桑新聞	大阪毎日新聞	大阪朝報	大阪朝報	大阪朝報	大阪朝報	大阪朝報	扶桑新聞	大阪朝報
宇田川文海	宇田川文海	(無署名)		宇田川文海	○作	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海作	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海作	宇田川文海
明40.2.15	明39.12.2	明38.12.21	明37.7.24	明37.5.28	明36.9.26	明36.8.5	明36.5.4	明36.4.22	明36.3.3	明36.2.6	明36.1.1	明36.1.1	明36.1.1	明36.1.1	明35.8.30	明35.8.27	明35.10.24	明35.9.8	明35.7.8

天理教の自然主義	有賀法學博士の「日本国民の精神上の疑問」を讀む(上)	有賀法學博士の「日本国民の精神上の疑問」を讀む(下)	靈界の開拓	七日紀行(上)	勤儉自彊	七日記行(下)	本教の特色	口八丁手八丁	四種類の人	勤儉と人物養成	(實 状)	陽気なる宗教	不焼不溺	如何に説教を聞く可き歟	活動の真意義	四十七士は何を成したる乎	
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	大阪経済雑誌	道	道	道	道	道	
乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	宇田川文海	乃	乃	乃	乃	乃	
友	友	友	友	友	友	友	友	友	友	友	〔無署名〕	友	友	友	友	友	
〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	宇田川文海	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	
明41・4・22	明41・7・22	明41・8・22	明42・4・29	明42・4・29	明42・5・30	明42・5・30	明42・8・22	明42・9・22	明42・10・22	明42・11・22	明43・1・15	明43・5・13	明43・6・5	明43・6・5	明43・7・5	明43・7・5	
講壇六誠	寒月照梅花	敬神	尊皇	如何にして此の聖恩皇徳に報ゆべき乎	本教の成立は今日あるが為め	御遷座御奉告祭所感	口先きの追従と心の誠	謹祈万福	宇田川文海翁曰く	(真 蹟)	元旦口号	天理叢書第二の宣教講話	宇田川文海翁より來書のまゝ	雪中の松	発願	墨の江より	賀茂真淵の夫人
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌
乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	乃	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海
友	友	友	友	友	友	友	友	友	友	友	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕
一記者	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕	〔無署名〕
明43・8・5	明44・1・5	明44・1・5	明44・3・5	明44・4・5	明44・5・5	明45・1	大2・1・15カ	大2・6・15カ	大2・9・25	大3・1・25	大3・4・15	大4・4・25	大4・5・25	大4・6・25	大4・6・25	大4・7・25	大4・7・25

(和歌五首)	道乃友	あやみ	大4・8・8
加茂真淵夫人に就て	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・8・25
曾我兄弟に就て	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・8・25
曾我兄弟復讐に就いて(下)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・9・25
有馬筆	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・9・25
二日の旅(上)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・9・25
私の此の顔の疵	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・10・25
二日の旅(下)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・10・25
御大礼奉祝の真意義	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・11・25
大阪の新聞歴史(其一)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・11・25
槐陰独語(其一)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・11・25
寄国祝	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・12・25
槐陰独語(其二)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大4・12・25
槐陰独語(其三)	大阪経済雑誌	〔無署名〕	大4・12・25
住吉御田植の神事	上方趣味	墨江浦人	大5・7・5
大塩後素先生逸事	大阪経済雑誌	宇田川文海	大5・8・25
音楽小話(一)	都山流楽報	宇田川文海	大5・9・10
地歌小解(一)	都山流楽報	墨江浦人	大5・9・10
大塩後素先生逸事(中)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大5・9・25

宇田川文海・補遺

音楽小話(二)	都山流楽報	宇田川文海	大5・10・10
地歌小解(二)	都山流楽報	墨江浦人	大5・10・10
大塩後素先生逸事(下)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大5・10・25
音楽小話(四)	都山流楽報	宇田川文海	大5・12・10
地歌小解(四)	都山流楽報	墨江浦人	大5・12・10
音楽小話(五)	都山流楽報	宇田川文海	大6・1・10
地歌小解(五)	都山流楽報	墨江浦人	大6・1・10
謝辞	都山流楽報	墨江浦人	大6・1・10
故人賀年の種々	大阪経済雑誌	宇田川文海	〔大6・1・25〕
音楽小話(六)	都山流楽報	宇田川文海	大6・2・10
地歌小解(六)	都山流楽報	墨江浦人	大6・2・10
故人賀年の種々(其二)	大阪経済雑誌	宇田川文海	〔大6・2・25〕
(和歌一三首)	大阪経済雑誌	宇多川文海	〔大6・2・25〕
音楽小話(七)	都山流楽報	宇田川文海	大6・3・10
地歌小解(七)	都山流楽報	墨江浦人	大6・3・10
昔の成金	大阪経済雑誌	宇田川文海	大6・4・8
昔の成金(其二)	大阪経済雑誌	宇田川文海	大6・5・12
音楽小話(十)	都山流楽報	宇田川文海	大6・6・10
地歌小解(三)	都山流楽報	墨江浦人	大6・6・10

皇太子殿下見学 旅行を拝して	音楽小話(出) <sup>⑮</sup>	地歌小解(一) <sup>⑯</sup>	地歌小解	さみだれ 日記抄出随感随筆	音楽小話(出) <sup>⑰</sup>	地歌小解(三) <sup>⑱</sup>	音楽小話(出) <sup>⑲</sup>	地歌小解(三) <sup>⑳</sup>	音楽小話(出) <sup>㉑</sup>	地歌小解(三) <sup>㉒</sup>	青年の覚醒	柳原神学士を歡 迎す	青木庄蔵君の復 活を祝す	音楽小話(出) <sup>㉔</sup>	地歌小解(三) <sup>㉕</sup>	音楽小話(出) <sup>㉖</sup>	地歌小解(三) <sup>㉗</sup>	音楽小話(出) <sup>㉘</sup>	近感録(其二)	音楽小話(内) <sup>㉙</sup>		
大阪経済雑誌	都山流楽報	都山流楽報	上方趣味	大阪経済雑誌	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	都山流楽報	大阪経済雑誌	都山流楽報		
宇田川文海	宇田川文海	墨江浦人	墨江浦人	宇田川文海	宇田川文海	墨江浦人	墨江浦人	墨江浦人	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	墨江浦人	墨江浦人	墨江浦人	墨江浦人	宇田川文海	宇田川文海		
大6・6・19	大6・7・10	大6・7・10	大6・7・10	大6・7・16	大6・8・10	大6・8・10	大6・8・10	大6・9・10	大6・9・10	大6・9・10	大6・9・1	大6・9・1	大6・10・8	大6・10・10	大6・10・10	大6・10・10	大6・10・10	大6・10・10	大6・11・10	大6・11・15	大6・12・2	大6・12・10

地歌小解(二) <sup>㉚</sup>	(和歌一首)	午歳新感(一)	海辺の松	午歳出生の靈物 兩界に於ける二 大偉人(一)	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	大阪経済雑誌	
墨江浦人	文海	半痴居士	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	墨江浦人	墨江浦人	
大6・12・10	大7・1・4	大7・1・4	大7・1・4	大7・2・2	大7・2・2	大7・2・2	大7・2・2	大7・2・28	大7・3・10	大7・3・10	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8	大7・4・8



地歌小解(二五) <sup>①</sup>	音樂小話 <sup>②</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・5・10
地歌小解(二六) <sup>③</sup>	音樂小話 <sup>④</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大14・6・10
地歌小解(二七) <sup>⑤</sup>	音樂小話 <sup>⑥</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・6・10
地歌小解(二八) <sup>⑦</sup>	音樂小話 <sup>⑧</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大14・7・10
地歌小解(二九) <sup>⑨</sup>	音樂小話 <sup>⑩</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・7・10
地歌小解(三〇) <sup>⑪</sup>	音樂小話 <sup>⑫</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大14・8・10
地歌小解(三一) <sup>⑬</sup>	音樂小話 <sup>⑭</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・8・10
地歌小解(三二) <sup>⑮</sup>	音樂小話 <sup>⑯</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大14・9・10
地歌小解(三三) <sup>⑰</sup>	音樂小話 <sup>⑱</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・9・10
地歌小解(三四) <sup>⑲</sup>	音樂小話 <sup>⑳</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大14・10・10
地歌小解(三五) <sup>㉑</sup>	音樂小話 <sup>㉒</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大14・10・10
隆達	○小初祖高三			
音樂小話 <sup>㉓</sup>		都山流樂報	宇田川文海	大14・11・10
地歌小解(二〇) <sup>㉔</sup>		都山流樂報	墨江浦人	大14・11・10
音樂小話 <sup>㉕</sup>		都山流樂報	宇田川文海	大14・12・10
地歌小解(二一) <sup>㉖</sup>		都山流樂報	墨江浦人	大14・12・10
音樂小話 <sup>㉗</sup>		都山流樂報	宇田川文海	大15・1・10
地歌小解(二二) <sup>㉘</sup>		都山流樂報	墨江浦人	大15・1・10
音樂小話 <sup>㉙</sup>		都山流樂報	宇田川文海	大15・2・10

地歌小解(二二) <sup>㉚</sup>	音樂小話 <sup>㉛</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・2・10
地歌小解(二三) <sup>㉜</sup>	音樂小話 <sup>㉝</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・3・10
地歌小解(二四) <sup>㉞</sup>	音樂小話 <sup>㉟</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・3・10
地歌小解(二五) <sup>㊱</sup>	音樂小話 <sup>㊲</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・4・10
地歌小解(二六) <sup>㊳</sup>	音樂小話 <sup>㊴</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・4・10
地歌小解(二七) <sup>㊵</sup>	音樂小話 <sup>㊶</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・5・10
地歌小解(二八) <sup>㊷</sup>	音樂小話 <sup>㊸</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・5・10
地歌小解(二九) <sup>㊹</sup>	音樂小話 <sup>㊺</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・6・10
地歌小解(三〇) <sup>㊻</sup>	音樂小話 <sup>㊼</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・6・10
地歌小解(三一) <sup>㊽</sup>	音樂小話 <sup>㊾</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・7・10
地歌小解(三二) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・7・10
地歌小解(三三) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・8・10
地歌小解(三四) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・8・10
地歌小解(三五) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・9・10
地歌小解(三六) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・9・10
地歌小解(三七) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(三八) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(三九) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(四〇) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(四一) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(四二) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(四三) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(四四) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(四五) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(四六) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(四七) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(四八) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10
地歌小解(四九) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	宇田川文海	大15・10・10
地歌小解(五〇) <sup>㊿</sup>	音樂小話 <sup>㊿</sup>	都山流樂報	墨江浦人	大15・10・10

註

- ① 秀吉と猿樂／隆景と小歌
- ② こずのと
- ③ 天下一／能興行／逸話
- ④ 菊の露
- ⑤ 尺八の事／一路居士
- ⑥ 袖香炉
- ⑦ 三鱗と一鉢／北条時政／杉山檢校／御流頂戴／紙鳶／漸く自然に近し
- ⑧ 松竹梅
- ⑨ 蛇の音楽に感ずる事／武田信玄の死／調和と幸福／高山流水／流泉啄木／不屈不撓
- ⑩ 銀世界
- ⑪ 人を相手にする人と、神を相手にする人／物は執る人の手に積れる／音楽と生活／芦庵の好意／某殿の熱心／音楽の力
- ⑫ 根曳の松
- ⑬ デモステネスとシセロ／春台の独語／徂徠と心越／徂徠の音楽趣味／今の楽は猶古の楽なり／一絃琴／笛の息の三品／熊沢了介の笙の調子
- ⑭ 楓の花
- ⑮ 美しい音楽者の話／ド、一の訓戒と狂歌の意見／音楽の力／好きの爲めに捕へらる／一発と一喝／三絃と争の名作／無形の法律なり
- ⑯ 夕空
- ⑰ こずのと
- ⑱ 芸術心と色気／芸術家としての柳里恭／夫唱婦和／音楽の鼓吹／笑ひの術／田植唄と茶摘唄／技芸勝れたる人の慎みかたの事
- ⑲ 滝尽し
- ⑳ 海の音楽／瑞典の鶯／趣味／笑ひの様々／学に志し芸に志す者の訓／節付の名目／小歌百首／音響の距離／以上の徹底、以上の意義／蕃山の音楽趣味
- ㉑ 嵯峨の秋
- ㉒ 盲目の讚美歌作者クロスビー女史(一)／耳根円通の三昧／笑の種々(二)／万の道の人／扇歌の頓智／三味線／虫干し(一)／隆達小歌百首(二)
- ㉓ 萩の露
- ㉔ 音楽家としてのルーテル／趣味(一)／盲目の讚美歌作者クロスビー女史(二)／笑の種々(三)／琉球国の小歌／小歌百首(三)／虫干し(二)／風外聴竹

- ②⑤ 紅葉づくし
- ②⑥ はぎのつゆ
- ②⑦ ルーテルと音楽／趣味(三)／首目の讚美歌作者クロスビー女史  
 (三)／笑の種々／隆達小歌百首(四)／虫干し(三)／音楽家と戦争
- ②⑧ 残月
- ②⑨ 家庭と音楽(二)／木村博士の生活／催馬楽評註／著聞集管絃歌舞の部、抜抄及び割註、略評／笑の種々(七)／扇歌の豪放／摘草
- ③① 春の曙
- ③② 露の蝶
- ③③ 美的教養(五)／至誠の声／催馬楽評註(八)／著聞集管絃歌舞の部、抜抄及び割註略評／笑の種々(六)／茶釜に響く鼓の音／自信の力  
 ／新なる力／常陸の国風歌／摘草
- ③④ 美的教養(六)／雨森芳洲の音楽／催馬楽評註(九)／著聞集管絃歌舞の部、抜抄及び割註略評／上手か名人か／東京土産(一)／名人の名言／摘草
- ③⑤ 美的教養(七)／五百年練磨の謠／催馬楽評註／著聞集管絃歌舞の部、抜抄及び割註略評／東京土産(二)
- ③⑥ 水は器
- ③⑦ 銀世界
- ③⑧ 笑門来福／禁中御能番組／神楽小解／良工の苦心／義士の風流(一)／声楽家の美談／新年言志
- ③⑨ 榊
- ④① 皇太子殿下御成婚奉祝唱歌／久遠の春／日本国民歌／良子女王殿下の音楽的御天分／神楽小解／義士の風流(二)／朝鮮雅楽最初の輸入／日本音楽の改良
- ④② 千代の鷺
- ④③ 御盛典と神楽歌／神楽／雅楽管絃の演奏／神楽小解／尉と姥とが三味線を抱て／小原女
- ④④ あやぎぬ
- ④⑤ 住吉神宮の古文書／獅子の曲／獅子頭／越路太夫の死去／名庭絃阿弥の死去／神楽小解／北海と吹笛／頼山陽と春雨／知恩院の法会と雅楽
- ④⑥ 京の四季
- ④⑦ 御歌の作曲／管絃団の創立／発音の研究／礼樂的教育／熊沢蕃山と音楽／神楽小解／滯仏土産の一節／人形の話／外国の人形芝居／能樂の知音／輝虎と平家／呂昇女史の引退
- ④⑧ 桜符(上)
- ④⑨ 壬生狂言に就て／謙信の風流／文士や音楽家が映画の作製／蓄音器の音譜の改良／神楽小解／乞食の親友／芝居ばなし／高

砂やの代りに組合歌／築地小劇場／河東節の文句／神楽獅子／同忍の段

④9 桜狩(下)

⑤0 学校劇／雅楽と西洋音楽の調和／内面的に美しい舞踊／義士の風流(三)／三味線の名匠／琴の名匠／阿蘭陀俄狂言(一)／湖畔大学／河東節の文句(二)

⑤1 墨絵の月

⑤2 日本の舞踊を家庭の娯楽に／芸術教育協会／新帰朝諸氏の芸術談／雪の奥地の三味線村／木村と真田の風流／阿蘭陀俄狂言(二)／俳優と所得税／各国音楽家の米朝／新しい盆踊／河東節の文句(三)

⑤3 雲の峰

⑤4 学校劇に対する文相の訓示／久邇宮に献上するヂンパリスト氏苦心の一曲／清浦前首相の音楽論／獅子舞／山姥／瘧れるまで／ハイカラなお寺／贅沢な虫の音楽／阿蘭陀俄狂言(三)／河東節の文句(四)／虫

⑤5 最中の月

⑤6 雅楽研究所／ドーズ氏の多芸多能／栄曜に餅の皮／幼年者の曲芸と活動の巻数／歌章の解釈と趣味の理解／女流楽人の音楽旅行／女優学校／女工にも舞踏が大流行／震災供養の盆踊り／

宇田川文海・補遺

枯木の匂ふやうに／襲名披露／阿蘭陀俄狂言(四)／大島の民謡／西洋音楽と日本人／河東節の文句(五)

⑤7 那須野

⑤8 雅楽の公演／人形と握手／東天歌／謡曲／華族が活優に／梅蘭芳の日本劇研究／操人形の精密／隠れたる發明家／地歌の衰へる原因は何故か／入門の規程／静好堂の心がけ／雑音／河東節の文句

⑤9 那須野(中)

⑥0 童謡から短歌へ／更にダンスも禁止か／恋愛小唄禁止／近代科学の華／文豪フランスの国葬／女代議士／竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(上)／支那の老儒の劇評／タイトル切取り／雑音／河東節の文句

⑥1 那須野(下)

⑥2 大内御能の新参／万歳・鳥追・春駒／百人一首／侮蔑的名称の撤廃に就て／竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎)／太鼓の音／初芝居の太鼓／両極端／雑音／河東節の文句

⑥3 金剛石

⑥4 御二方とも音楽が御好き／白痴の少女／外国の音楽に対する興味／古雅な唄声／豊公と和歌／竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎)(下)／女子教育の試み／日本には日本の芸術がない

史の計報／精神的結合／能舞台の建設／地上の音響

⑥5 江の島(一)

⑥6 「君が代」の会／奉祝演奏／国歌の首唱者／カラーチエ賞／

戸山軍楽隊新楽堂／鴨緑江節／乱調の中の正調／武器は実力／  
驚の学校／無線音楽の効能／誕生祝福／東儀鉄笛氏の死去／象  
のダンス

⑥7 江の島(二)

⑥8 国歌制定の功労者／君が代とヤートコセー／天地開闢と君が

代／ヴァイオリンの御練習／京都に音楽学校が無い／音楽学校  
増設問題／盲人に洋楽／一休和尚と音楽／宗教映画の作成／浪  
花節で説教／菊花女学校／謡代りの労働歌

⑥9 江の島(三)

⑦0 日露芸術の交驩／日露交驩管絃演奏／露西亜の芸壇／日比谷  
と浅草に／囚人にオルガン／民謡大会／まづ芸術から／洋楽の  
推移／外人楽士の箏曲評／慈善楽人(楽人逸話二)／豊公と和  
楽(一)／竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎) 追加(一)／最  
大の浄瑠璃作者竹田出雲／地方民謡／十八台のピアノ

⑦1 江の島(四)

⑦2 童謡の禁止／大歌に就て／田中楽長と日活／豊公と和歌(二)／  
竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎) 追加(二)／鬼才の提  
琴(楽人逸話二)／金では売らぬ／音楽省の設立／久野久子女

⑦3 小督曲(一)

⑦4 銀婚式奉祝／舞樂の上覧／琉球舞踊の台覧／青年音楽の練習  
会／新しい舞踊／盲目の音楽家／聾啞者の芝居見物／豊公と  
和歌(四)／竹田近江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎) 追加(三)／  
芸術の魅力(楽人逸話三)／追分節の復活／朝鮮民謡の復興／  
死に抵るまで

⑦5 小督局(二)

⑦6 東京市の公会堂／少年音楽手の養成／音楽記者倶楽部／秩父  
宮殿下英語の御研究／隆達の記念碑建立／欧州訪問飛行声援歌  
／琉球音楽／琉球の歌謡と日本の小唄／豊公と和歌(五)／竹田近  
江(出雲)と吉田三郎兵衛(文三郎) 追加(四)／裸体の楽聖(楽  
人逸話四)／謡と生花／九十歳の声楽

⑦7 小督局(三)

⑦8 土人舞踊の台覧／歓迎歌の一節／青年の教育問題／芸術的天  
才／豊公と和歌(六)／竹田出雲の楽屋貼出文に就て(上)／琉球演  
劇護佐丸敵討(上)／天使と歌女(楽人逸話五)／手向けに哥沢  
節／ロンドン楽家数／農村音楽

⑦9 小督局(四)

⑧0 所が生んだ政治家／ツ氏の計／片山春子師匠の舞納め／面白

い統計(一)／軽い小歌／豊公と和歌追加(七)／信長と音楽／竹田出雲の楽屋貼出文に就て(上)／琉球演劇護佐丸敬討／馳走の効能(楽人逸話六)／締めやの音楽／芸妓の利用

81 熊野(上)

82 音楽院の設立／降達の建碑式／ラジオの利害／面白い統計(下)／豊公と和歌追加(八)／持病の突発(楽人逸話七)／琉球演劇護佐丸敬討(下)／声明のラヂオ放送／デニス夫人の感想／歌踊講習所

83 熊野(下)

84 学生歌作成の運動／国民歌の当選発表／日本音楽の観察／日本青年会館開館式(上)／豊公と和歌追加(九)／興行場の増加／正直な裁判(楽人逸話八)／音楽講座の放送／奉書仕合に就て(上)／鉄兜の余韻

85 長恨歌(一)

86 明治天皇表徳歌／豊後の岩戸神楽／踏歌に就て(上)／宝引／天来の妙音／日本青年会館開館式(中)／無礼者―馬鹿者(楽人逸話九)／奉書仕合に就て(中)／珍らしい四絃琴／新年述懐

87 長恨歌(二)

88 秩父宮殿下と音楽／官立音楽学校／芸術的劇場運動失敗／踏歌に就て(下)／御七夜の歌／日本青年会館開館式(下)／奉書仕

合に就て(下)／戦間に音楽の放送／珍らしい展覧会／窓の村竹の翁(上)／今晚は是で御免を蒙ります(楽人逸話十)／訪欧大飛行成功歓迎歌

89 長恨歌(三)

90 李王家の雅楽研究／連台大音楽会／郷土芸術第二回／楽聖の百年祭／国歌の冒瀆／労働楽団の出生／神事歌劇の創作(上)／芸が身を助ける／俳優が打扮を変へて当りを取った事／元氣な大家(楽人逸話十二)／窓の村竹の翁(下)／研欲し踊り／音楽の効能／絶絃の感

91 長恨歌(四)

92 東京市に対する提議／神事歌劇の創作(下)／出雲の古代舞踊／楽聖の生涯の概要／反撥の伴奏(楽人逸話十二)／パリの紀元節／楽人ハープの購入／富士の一節／忠臣蔵に就て(上)／辰巳屋の老爺／音楽と酒の売行き／米国の活動館／芸術の形式と内容

93 長恨歌(五)

94 聖徳太子御忌舞楽大法要／子供芸術協会／音楽村の創設／労働者学校／建国神社の建立／売笑婦の哀歌／地ならしの歌／楽聖の生涯概要(下)／郷土芸術の再開催／忠臣蔵に就て(下)／神様の演奏(楽人逸話十三)／キネマ音楽／自然と音楽／技芸の

四等

⑨5 藤戸(上)

⑨6 明治音楽の起原／酒と音楽／子供の楽器／マッコーマック氏  
／富有な女流楽家／竹田出雲の百七十年忌／牛に音楽を聞かせ  
る／取置き席(楽人逸話十四)／訣別の酒宴／日本文化の宣  
伝

⑨7 藤戸(下)

⑨8 楽器献上／奉迎歌／台湾の今昔／義大夫三味線開祖記念碑建  
設／浄瑠璃節統一の苦心談／高砂や／鯨立の用意(楽人逸話十  
五)／動物の吼声／武蔵野

⑨9 水は器

⑩00 御歴代と音楽(一)／「日本音楽の創造」の一節／日本音曲の歌  
詞／初めて世に出る琵琶軍医／二個の宝石(楽人逸話十六)／  
歌垣に就て(上)／河内名物盆踊り／東西の二大天才／頼山陽の  
風流

⑩01 末の契り

⑩02 御歴代と音楽(二)／歌垣に就て(下)／盆踊に就て／謠曲の十五  
徳／新納忠元の文雅(上)／パーチーの扇子(楽人逸話十七)／  
虫干(一)／大に買つてやるべし／警官に音楽講座

⑩03 竹生島

⑩04 御歴代と音楽(三)／地震―秀吉―家光／音楽的愛国大祭／音楽  
教育／故人津太夫君の憶出／虫干(二)／現金主義な楽家(楽人逸  
話十七)／新納忠元の文雅(下)／志士の情歌

⑩05 竹生島(二)

⑩06 御歴代と音楽(四)／和宮奉賛歌／不思議な楽器／孤児の合唱／  
獄裡に楽隊組織／虫干(三)／撰津大掾の憶出(上)／忘れ難き接吻  
(楽人逸話十九)

⑩07 竹生島(三)

〔付記〕「商工浪華の魁」序・亀末広卯の日餅の引札・「天下茶屋の  
名所紹鷗の森」の三項を本稿に収め得たのは、肥田皓三氏の御教示  
の賜物である。

(追加)

銀婚御式祝歌	商業資料	宇田川文海	明27・3・10
春駒	商業資料	宇田川文海	明27・4・10
婦人慈善会に臨みて美術品を観る	商業資料	宇田川文海	明27・5・10
堺の井谷氏が醸せる七種の名酒を七福神の名によそへてめづる	商業資料	宇田川文海	明27・6・10
詞			

宇田川文海君の 經濟談	松の寿司口上	祝文	茶製糖	山里海	凱歌石鹼の贊辭	鎮西館開館の祝 詞	中川画伯か萱堂 の葬りを贈りて	開業十三週年	時宝堂十二週年 の祝	真面目	槐陰独語(二)	豊太閤の半身	己の如く爾の隣 を愛す可し	誠より流るる血 と涙と汗と一源	近感録
商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	商業資料	大阪經濟雜誌	大阪經濟雜誌	大阪經濟雜誌	大阪經濟雜誌	大阪經濟雜誌	大阪經濟雜誌
宇田川文海述	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海作	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海 (講演)	宇田川文海	宇田川文海	宇田川文海
明27・8・10	明28・3・10	明28・3・10	明28・4・10	明28・5・10	明28・5・10	明28・6・10	明28・7・10	明28・9・10	明29・1・10	大5・1・25	大5・1・25	大5・2・25	大5・3・25	大5・6・25	大6・11・2